随想

成長と島国根性

森崎　晟*

日本には昔から島国根性のあることは，自他ともに認めているところである．これは，日本が地理的にも，社会慣習においても国際社会から離れているために，日常生活において日本の国際社会での位置を忘れてしまうことが多いからである．したがつて，これに関連した具体的な事象は，歴史的にその形と内容は違うが，質的にはすべて一脈相通ずるものがあり，とかく自己本位に考えたものの進め方をするという島国根性の特徴を如実に表わしている．

たとえば，経済成長の場合をとつてみると，戦前における日本の経済規模は相対的に欧米諸国に比してかなり劣つていたし，またもちろん資本主義経済が，大正の末期より昭和の初期にかけて漸次競争的に興隆をみたのであるが，各産業ともに資本と経営はおおむね一体のものであつたために，急激な成長はなかつた反面，好不況に対しても大体堅実な経営振りであつた．この時期においては，各産業の興隆は国内的な競争が主体で，内容も量的な勢力拡大よりも質的な企業合理化・近代化といつた，むしろ先駆的なものであつた．すなわち，その成長過程をみると，日清・日露の戦役を経た日本は富国強兵的な国策が続き，ことに大正から昭和にかけては，各産業とも生産技術の開発に力を入れてそれぞれ成長をはかることになつたが，その中でも基幹産業，公益事業および交通機関などは相当な成長をみたのである．しかしながら，まだいずれもが国内の需要を充たすことを第一義としたもので，外国との競争においては比較にならない程度の規模であつたし，とくに技術の開発は欧米諸国に比べて質的には相当遅れており，特殊な技術はほとんど外国より導入されたのである．しかしそれも時間とともに漸次向上して昭和15年前後にはある程度諸外国に追随するものもできていた．

そして太平洋戦争勃発当時が，日本の軍事力・経済力ともに過去の歴史において頂点に達したわけであるが，それも終戦と同時に一応壊滅し，戦後の復興期において新しい歩みを始めたのである．それは自由経済と民主主義の普及に支えられて，経済の成長テンポは急に高度化したのであるが，ここに至つて長い抑圧から解き放たれた各企業は，自由放任に流れる風潮の中にあつて先を争い，協調や共存共栄は口先だけで実行は伴わず，自己本位に他人のこと，ましてや外国のことなど考えないという島国根性がむき出しになつたのである．これは特に戦後財閥の解体・集中排除あるいは責任者の追放などで経営責任者の交替や若返りにより代表的な企業はほとんど資本と経営が分離され，さらに産業の復興・企業の合理化のため，規模の大小を問わず借金経営が大きくクローズアップしてきたことが，この島国根性の発揮に拍車をかけたのである．このため，戦前の経営者も戦後の復興に際しては，われ勝ちに先を急ぐあまり無理な復旧と成長を企てたので，企業自体が戦後の揺籃期の経済変動についていけず，倒産をしたりこれに類する結果をもたらした．したがつて戦前における立志伝中の人々のなかにもこうした憂き目をみたのは，既往の自己の建設ベースを保持できなかつた結果であり，ましてや戦後新規に事業を企てた人々においては，長期の見通しもなく思いつきや人真似で背伸びをしては消えていくという数多くの例は，やはり島国根性のなす災いといえよう．これらはすべて自己の立場だけを考えて，社会との共存共栄による相関関係を無視したところに問題があつたのである．

*　(株)中山製鋼所専務取締役　本会理事

日本のここ数年の過度の成長振り，たとえば年率 10 数パーセント以上という事柄は，欧米諸国よりみた場合その根拠が経済理論なり，あるいは学識経験では解明できないものであるといわれている．これは，もちろん戦後の日本における科学技術の進歩に負うところも大であり，それなりに高く評価もされているが，反面前述の自己本位と借金経営に裏付けられた島国根性が，高度成長を誘引したという一面がある．したがつて，諸外国も始めの間は日本の高度成長に感心し目を見張つていたが，今日では日本の高度成長の自国に及ぼす影響に怖れと不信を抱き，いわゆるエコノミックアニマル視して対抗策を講じようとしており，悪くすれば日本は村八分される怖れすらある．いずれにしても，欧米諸国は人間でいえば大人に相当する国々であるに反し，日本は現在大人とも未成年とも見極められないまことにデコボコの多い，したがつて無駄も多い国柄であるが，国民のバイタリティと勤勉努力が高度の成長につながつているといえるし，この主因は何とも合理的な説明のつかない島国根性の積極的な表われというべきではなかろうか．かつて統制経済時代はやむを得ず法に従つて自粛していたが，自由経済に移行するとともにいわゆる羽を伸ばして跳び歩く結果となり，悪くいえば日本人自体にも，なぜこのように過度の成長が起こつているかよくわかつていないようであるし，まして外国人にはその真相はわからないのが当然と思われる．

このような環境にあつて，今後の日本国家なり国民は，71年度を期していかにあるべきかを真剣に考えねばならぬ転向期にさしかかつているのではないかと思う．日本の国は昔から実に恵まれた国土であり，国難にも何回となく遭遇したがそのつど収拾は何となくうまくいつており，あの歴史を画す太平洋戦争の敗戦にしても，国柄まで変えねばならぬ（憲法の改正）ほどの混乱期に直面しながら，その後の復興ではこれまた非常に恵まれて，政治・経済および文化などすべての面で順調にことが運び，結果的には国家も国民も従来の島国根性を深く反省することもなく，今日まで過ごしているように思われる．

しかしながら，今後の日本が本当の意味で先進国家の仲間入りをし，世界平和に貢献しようとするならば，日本の国家ならびに国民全体が国際的視野を広め，秩序ある競争を深く自覚し，過度の成長から安定成長を進めるべき大切な時期を迎えていると考えられる．したがつて，それぞれ自己の在り方を反省し，少なくとも自己本位な考え方に立つ前に他人の立場を考え，外国の立場を考える心の余裕をもつ人格を形成せねばならないと思う．経済力がいかに大きく成長しても，また技術開発が進んでも精神面の真の成長がなければ，いつまでたつても安定成長は得られないのではないか．他人より，また外国より信頼と親近感をもたれない一匹狼ではまことに心淋しい限りである．せつかく本質的にすぐれた国土・国民である日本の将来を考えるとき，島国根性が是正されて地球的な広い視野の国家と国民への向上を考えることが，今日の大きな課題であろう．